

『元朝秘史』音訳漢字の基礎方言問題

中村雅之

1. はじめに

近年、『元朝秘史』および甲種『華夷訳語』のモンゴル語を表す音訳漢字について、その漢字音の基礎方言をめぐる論考が立て続けに出ている。更科(2007)、ブリグド(2007)、中村(2007)、ブルグド(2009)などである。服部(1946)以来、ながらく論じられてこなかったこの問題に光が当たりつつあるのは喜ばしいことである。

更科(2007)は甲種『華夷訳語』の漢字音の基礎方言について、『中原音韻』と幾つかの差異を有しつつ、依然として南京官話の影響を受ける以前の、明代初期の北方官話の特徴を濃厚に残した変種¹であるとする見解を示した。中村(2007)は更科説への反論として、甲種『華夷訳語』および『元朝秘史』の漢字音訳が南京音に基づくものと結論づけた。ブリグド(2007)は、『元朝秘史』の漢字音訳が「主には北方官話の北京を中心とした北京官話、西安を中心にした中原官話を基本とし、さらに白話音に基づく傾向が強いと言える」とするが、この結論自体がやや曖昧な上に、論述方法が余りにも粗雑であり¹、これに論評を加えるのは難しい。ここでは、同氏²の最近の論考であるブルグド(2009)について検討し、次いで他の諸論考も含めた総合的な評価を試みたい。

2. ブルグド(2009)の所論と問題点

『元朝秘史』モンゴル語の円唇母音/o/と/ö/は、漢字音訳において区別される場合とされない場合がある。ブルグド(2009)では、/jo~jö/および/čo~čö/の区別に注目している。わずかな例外はあるが、おおむね以下のような対応にあるという。

/jo/ : 「勺、卓」 /jö/ : 「拙」
/čo/ : 「搨、綽」 /čö/ : 「啜、輟」

1 具体例を挙げれば、音訳に用いられた各々の字について各地の方言音を掲げているが、「阿」字については北京、西安、武漢、温州、アモイの音を挙げ、「合」字については北京、西安、太原、双峰の音を挙げている。都合のいい字音を恣意的に集めていると思わざるを得ない。また、「合」をモンゴル語の「ha」を表記するための字としているが、「ha」を表す字は一般に「哈」であって「合」ではないので、「合」字の方言音を参照するのは無意味である。ほかにもデータの扱い方に多くの問題が見受けられる。

2 カナ表記では「ブリグド」と「ブルグド」であるが、ローマ字表記では共に「Kereyidjin D. BÜRGÜD」であるから、おそらく同一人物なのであろう。

このうち「擲」については『中原音韻』に登録されていないため、男性語に用いる他の三字「綽勺卓」について、以下のように述べている。

仮に、『秘史』が南京音に基づいて音写されたとすれば、上述した「11蕭豪」韻の三字は、「12歌戈」韻と同様の音声を持つため、「12歌戈」韻の字と同様に、男性語、女性語を区別する必要はなかったと思われる。しかし『秘史』では、男性語と女性語を区別して表記していることから、「12歌戈」系統の音とは異なる音であったと考えられる。要するに、『秘史』の音訳者の方言では、「11蕭豪」韻の三字は、文言系統の音ではなく、白話系統の音で使われていたと推測できる。

この部分の記述は甚だ分かりにくい。まず、「11蕭豪」韻の三字は、「12歌戈」韻と同様の音声を持つ」とは、具体的には、モンゴル語の/čö/や/jo/に用いられる「綽勺卓」の三字(=『中原音韻』の「11蕭豪」韻に属す)の韻母が南京音で[-oʔ]であり、『中原音韻』「12歌戈」韻の韻母が南京音で[-o]であったということであろう。これについては、現代南京音も同様であり、明清の宣教師ローマ字資料(=主に南京官話による)もまた同様であるから、そう考えて差し支えない。

しかし、それに続いて、「(「綽勺卓」三字が)「12歌戈」韻の字と同様に、男性語、女性語を区別する必要はなかったと思われる」と述べているのは、全く理解できない。『中原音韻』の「12歌戈」韻に属する字で、男性語・女性語の双方に用いられるのはモンゴル語/bo~bö/に用いられる「孛」、/do~dö/に用いられる「朶、多」、/to~tö/に用いられる「脱」、/no~nö/に用いられる「那」などであるが、これらの音節には女性語に当てる適当な韻母を持った字がなかったために、技術的に男性語・女性語の区別が出来なかったのである。/jö/と/čö/の場合には「拙」「啜、輟」(『中原音韻』の「14車遮」韻)を用いているが、これらの字に共通する韻母(当時の北方音で[-iue]、南京音でおそらく[-ueʔ])は結合する声母が限られており、女性語の音節/bö, dö, tö, nö/などを表すことのできる適当な字は「14車遮」韻の中にはなかった。そのため、次善の策として「12歌戈」韻の字を男性語・女性語の双方に用いたわけである。

また、男性語の音節/jo/と/čö/については「勺、卓」「綽」(『中原音韻』では「11蕭豪」韻)などを用いたのであるが、これも「12歌戈」韻の中にモンゴル語の/j, č/に当てられる声母を持った字がほとんどなかったために「勺、卓、綽」が選ばれたのである。

さらにブルグド氏は、「要するに、『秘史』の音訳者の方言では、「11蕭豪」韻の三字は、文言系統の音ではなく、白話系統の音で使われていたと推測できる。」とまとめているが、氏も利用している楊耐思の『中原音韻』の推定音では「卓」が[tʃau]、「綽」が[tʃʰisʉ]である。果たして、モンゴル語の男性母音/o/を表すのに、漢語の[-isʉ]という

韻母を用いるのは適当であろうか³。『西儒耳目資』などを参考にすれば、これらの字の当時の南京音は「卓」が[fʰoʔ]、「綽」が[fʰoʔ]であったと考えられ、南京音を基礎方言として想定する方がはるかに無理がない。要するに、残念ながらブルグド氏の所説は説得力を欠くと言わざるを得ない。

3. 方法論について

一般に、古い時代の資料に用いられた漢字音の基礎方言を論ずる際に重要なことは、明確な基準を示すことである。その意味で、かつて服部(1946)が濁音声母の有無を基準にして、『元朝秘史』における漢字音の基礎方言を定めようとしたことは、方法論的には非常に明確であった。氏は明初の南京音に濁音声母があったと考えていたため、『元朝秘史』の音訳漢字においてすでに濁音が清音化している事実をもって、基礎方言を南京音ではなく北京音と見なした。もっとも、当時の南京音が濁音を有していたという想定には根拠がなく、服部説に十分な説得力はないのであるが、明確な基準を示した点を評価したい。

更科、ブルグド両氏は、入声字に文言音と白話音の両読が見られることに着目して基礎方言を論じている。しかし、そこに確認される「白話音」はわずか数例に過ぎないものであり、そのような例外的な現象によって基礎方言を論じるのは方法論として適当ではない。むしろ全体の傾向がいかにあるかという点をまず観察すべきであり、例外については別に検討するのが適切な手順であろう。⁴

中村(2007)では、モンゴル語/gö/に対して「哥、歌」、/kō/に対して「可」を用いることを主たる基準とした。これらの字がモンゴル語の円唇母音に用いられるのは明初の音訳における確乎たる傾向であり、元代の漢字音訳において/ge/および/ke/に対して用いられるのと明瞭な対比を示す⁵。元代の音訳が北京音[-ɣ]に拠り、明初の音訳が南京音[-o]に拠っていると考えれば合理的な説明が可能である。

今後、『元朝秘史』や甲種『華夷訳語』の音訳漢字の基礎方言を検討する際には、明確な基準となる事実が示されることを希望する。

3 もしもブルグド氏の解釈が正しければ、男性母音/o/を有する音節は「11蕭豪」韻の非入声字でも表記されるはずであるが、そのような例はない。

4 中村(2007)では、白話音によった字(「伯、克、澤」など)は例外的に元代の音訳を踏襲したものと見なして、その理由について説明を試みている。

5 この事実は、長田(1953)において指摘され、その確認と再検証が吉池(2005)においてなされた。

<参考文献>

- 長田夏樹(1953)「元代の中・蒙対訳語彙「至元訳語」」『神戸外大論叢』第4巻第2・3号. 『長田夏樹論述集(上) 近代漢語の成立と胡漢複合文化』(ナカニシヤ出版, 2000)所収.
- 吉池孝一(2005)「哥葛などの元代音について」『KOTONOHA』36.
- 更科慎一(2007)「甲種本『華夷訳語』音訳漢字の基礎方言の問題」『佐藤進教授還暦記念中国語学論集』(好文出版).
- 中村雅之(2007)「『華夷訳語(甲種)』漢字音訳の基礎方言」『KOTONOHA』53.
- ブリグト(2007)「『元朝秘史』における漢字音の「文白異読」」『日本モンゴル学会紀要』37.
- ブルグド(2009)「『元朝秘史』の漢字音の基礎音系についてーモンゴル語のčö/čö, jo/jöの表記に使われた漢字音を中心にー」『日本モンゴル学会紀要』39.